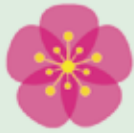


春の展示

うめ



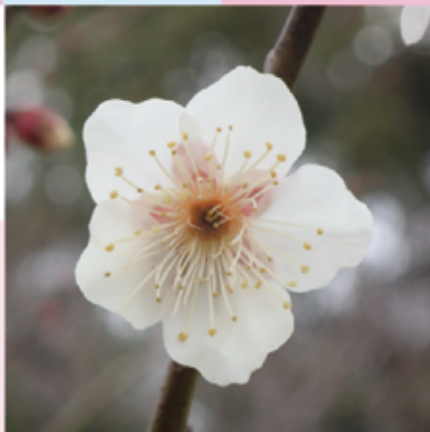
もも



さ

く

ら



令和2年

2月15日(土)~6月28日(日)



日本人にはなじみ深いうめ・もも・さくらは、春を代表する植物です。本展示では、似ているようでちょっとずつ違うこれらの植物について、標本や浮世絵を用い、科学的・文化的側面から紹介します。

千葉県立中央博物館
NATURAL HISTORY MUSEUM AND INSTITUTE, CHIBA

問い合わせ

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 (青葉の森公園内)
TEL: 043-265-3111 (代表) FAX: 043-266-2481

<http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/>

Follow @chiba_chuohaku

CHIBA

ごあいさつ

千葉県立中央博物館では、ウメ、モモ、サクラの花期にあわせて、外に咲く美しい花々とともに展示をお楽しみいただけるよう、令和2年2月15日より春の展示「うめ・もも・さくら」を開催しておりましたが、新型コロナウイルスの拡散防止のため、3月3日より臨時休館としておりました。

このたび、再度、開館を迎えることができたことを受けて、当初5月17日までとしていた展示期間を6月28日まで延長することといたしました。しかし、現在はまだ閉館前の日常には戻ることが出来ない状況が続いております。そこで、皆様には展示をよりお楽しみいただけるよう、展示内容の一部を解説したリーフレットを作成しました。御来館いただくことができない方には、本書によって、少しでも展示の雰囲気を楽しんでいただければ幸いです。

本展示の開催にあたっては多くの関係者、関係機関の方に御支援・御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

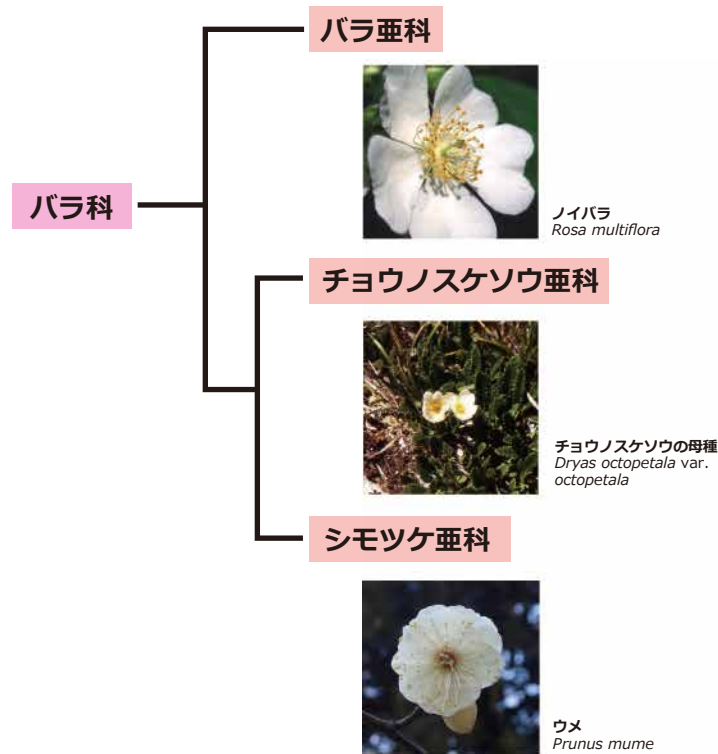
令和2年6月

千葉県立中央博物館 館長 古泉 弘志

うめ・もも・さくらの仲間分け

バラ科植物の分類

ウメ、モモ、サクラはバラ科の植物です。バラ科は世界に約 130 属、約 3400 種が知られており、日本には 37 属、約 250 種が生育しています。木になるもの（木本）では、落葉と常緑の両方があり、木にならないもの（草本）も存在します。最新の分類では、バラ亜科、シモツケ亜科、チョウノスケソウ亜科の3つの亜科に分けられています。



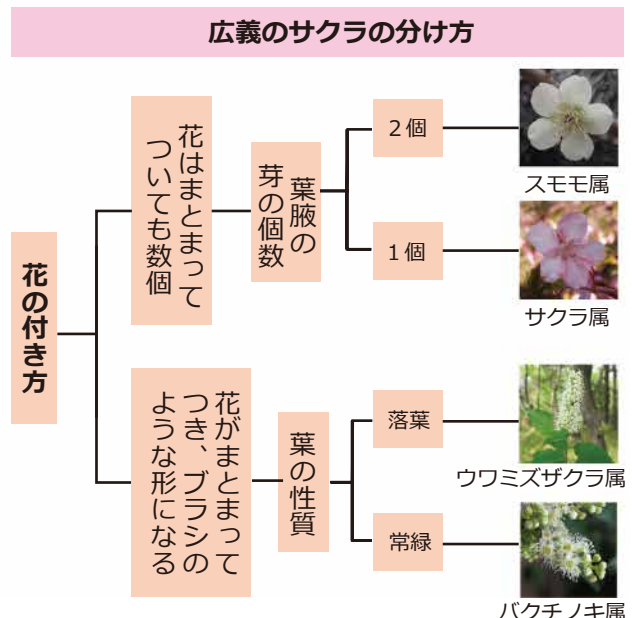
身近なものでは、バラ、イチゴ、キイチゴ、ワレモコウなどの仲間が含まれる。草本や低木の分類群が多く、複葉で、托葉を持つものがほとんどである。

日本にはチョウノスケソウの1種しかない。地面を這うように生育する小さな低木で、裏面が白い綿毛で覆われた硬い葉をつける。花弁は8~9枚。

ウメ、モモ、サクラが含まれる亜科。葉の付き方や形態、果実の形態などが多様である。身近なものではリンゴやナシ、ビワやカリンもシモツケ亜科である。

広義のサクラと狭義のサクラ

かつては形態に基づいた植物分類が主流であり、似た特徴をもつウメ、モモ、サクラはすべてサクラ属として扱われていました。しかし最近では、遺伝子解析による分類が主流となり、従来のサクラ属は、スモモ属、サクラ属（狭義）、バクチノキ属、ウワミズザクラ属の4つに分かれています。



うめ・もも・さくらの仲間分け

冬芽で見分けるうめ・もも・さくら

ウメ、モモ、サクラは花や果実の形態だけでなく、冬芽の特徴も少しずつ異なります。サクラの仲間は複数の種があるため、種間で特徴が異なることもありますが、ウメは枝が緑色であること、モモは芽が毛で覆われていることから、区別することができます。

	ウメ	モモ	サクラ
外見の違い			
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・枝は緑色 ・冬芽は節に1~3個 ・芽は無毛 ・花芽は大きい ・葉芽は小さい ・枝痕が先端につく 	<ul style="list-style-type: none"> ・枝は茶色 ・冬芽は節に1~3個 ・芽葉毛で覆われる ・花芽と葉芽はほぼ同じ大きさ 	<ul style="list-style-type: none"> ・枝は茶色 ・冬芽は節に1個 ・芽は無毛または有毛 ・有毛の種類では、モモほど毛は多くない ・短枝に芽が付くことがある

あれもサクラ！、これもサクラ？

ウワミズザクラは、5mm程度の小さな花が房状につく落葉樹です。葉の形はサクラの葉によく似ており、サクラの仲間の特徴がみられます。バクチノキは葉が常緑で、サクラとは見た目が違いますが、サクラの仲間の特徴である蜜腺がみられます。なお、以前は広義のサクラ属 (*Prunus*) でしたが、最新の分類では2種とも別属になっています。



ウワミズザクラ (*Padus grayana* (Maxim.) C.K.Schneid.)
漢字名：上溝桜



バクチノキ (*Laurocerasus zippeliana* (Miq.) Browicz)
漢字名：博打の木

100年ぶりの新種！ クマノザクラ

クマノザクラ *Cerasus kumanoensis* T. Katsuki

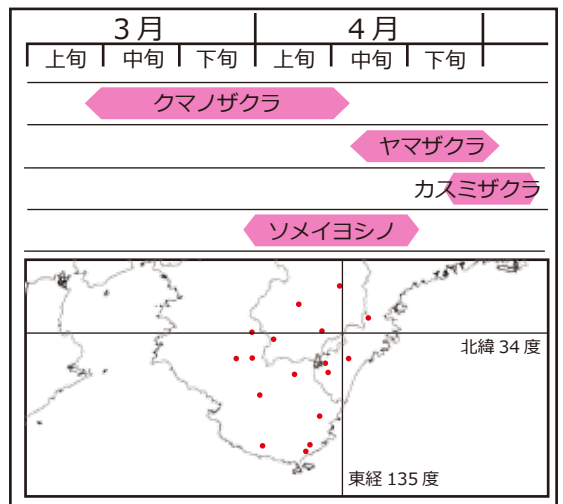
2016年の3月に森林総合研究所が紀伊半島南部で調査を行っていたところ、今まで知られている形態とは異なるサクラが発見されました。その後、詳細な調査を行ったところ、三重県、奈良県でも同様のサクラが見つかり2018年に新種として記載されました。国内に分布する野生種では、1915年に新種記載されたオオシマザクラ以来、約100年ぶりとなります。

クマノザクラの特徴（他種との比較）

クマノザクラの花期と分布

	クマノザクラ	ヤマザクラ	カスミザクラ
花の数	1～2個	2～4個	2～3個
花色	ピンク～白	白	白～ピンク
葉形	狭卵形	狭楕円形	広卵形
葉長	4～8 cm	5～9 cm	6～12 cm
葉幅	1.8～3.6 cm	3～4 cm	3～6 cm

写真：森林総合研究所
データは Katsuki (2018) Acta Phytotaxonomica et Geobotanica, 69 (2): 119-133 より



日本に自生する サクラ

日本には、11種の野生のサクラが生育しています。このうち千葉県に自生するのは、オオシマザクラ、カスミザクラ、マメザクラ、ヤマザクラの4種です。サクラはとても身近な植物ですが、公園などで見られるソメイヨシノなどは園芸品種であり、野生種ではありません。



※ 本展示にはカンヒザクラを自生種としたが、石垣島の集団は自生種ではないとの見解もあり、その場合野生のサクラは10種となる。
※ クマノザクラの分布は上図参照。

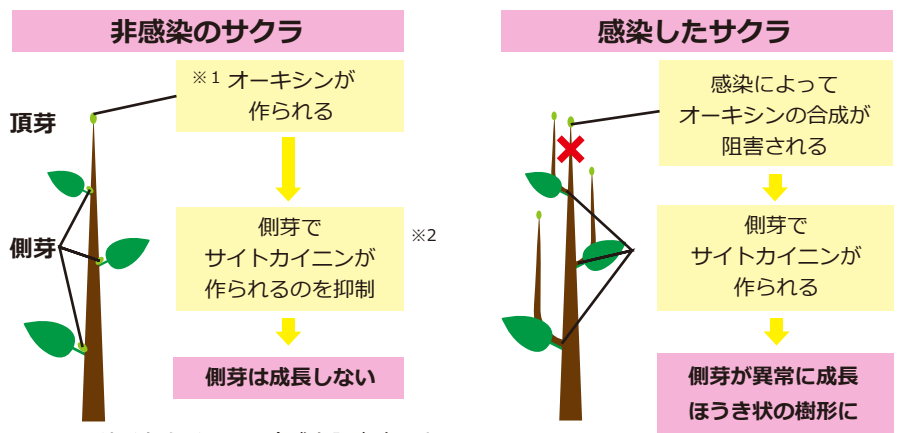
サクラを取り巻く諸問題

サクラ天狗巣病

サクラの仲間が感染する植物病の一種で、特にソメイヨシノへの感染率が高いことが知られています。感染した枝は細かく分枝し、花よりも早い時期に葉をつけてしまいます。菌類に感染して引き起こされるホルモン異常が原因とされていますが、治療法は発見されていません。花の時期に見栄えが悪くなることや、樹勢が弱ることなどから、問題となっています。



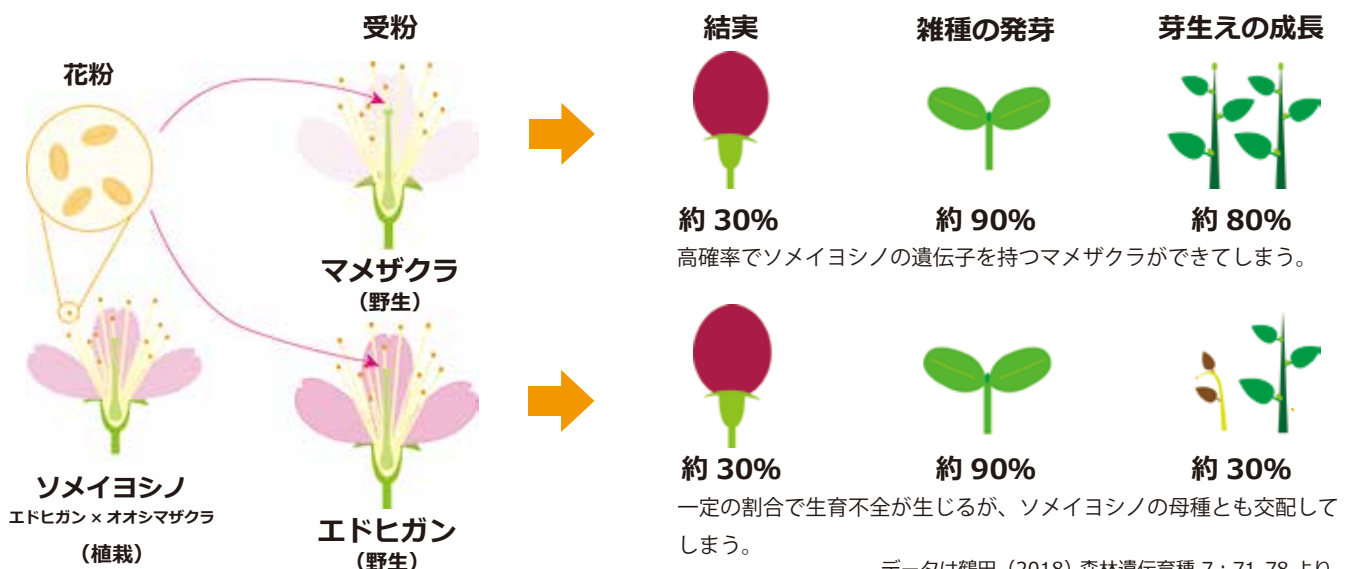
サクラ天狗巣病に感染したヤマザクラ (木更津市)



※1 サイトカイニンの合成を阻害するホルモン
※2 側芽の成長を促進させるホルモン

遺伝子汚染

日本には、膨大な数のソメイヨシノが植えられています。その花粉が野生のサクラに受粉してしまい、ソメイヨシノの遺伝子を持つ個体が形成されることがあります。人間による植栽が原因で近縁の野生個体群との交雑が起きることで、野生個体群の遺伝子構成が変化してしまうことが懸念されています。



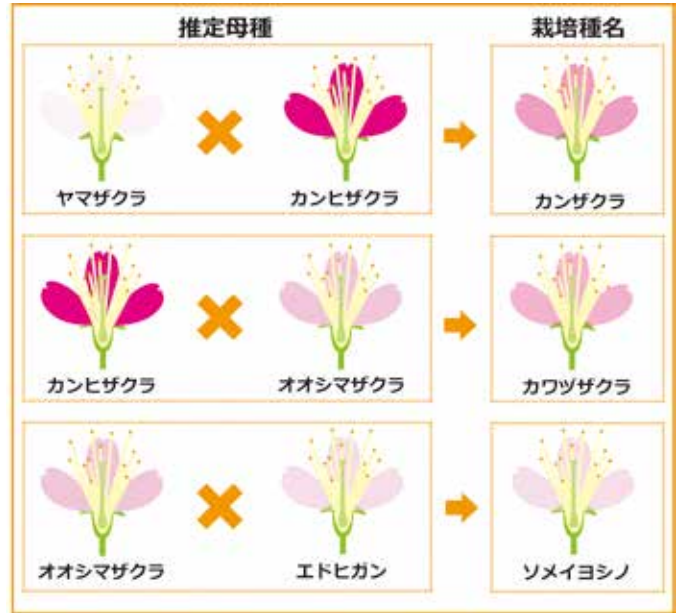
データは鶴田 (2018) 森林遺伝育種 7 : 71-78 より

サクラの園芸品種

品種の開発

人間は意図的に個体を選択して繁殖させたり、自然界では起こりえない交雑をさせることで、多くの園芸品種を生み出し、暮らしを豊かにしてきました。しかし、園芸品種が原因となって、遺伝子汚染など自然界の遺伝的多様性に影響を及ぼすことが無いように、注意しなければなりません。

雑種起源の品種の一例



桜の園芸品種

日本には、サクラの園芸品種が300種類以上あると言われています。今日でも広く観賞されている日本のサクラの品種の多くは、江戸期に生まれたとされています。明治期にはサクラの栽培は衰退しますが、荒川の堤の補修とともに多くの品種のサクラが植栽され、保存の中心となりました。

江戸期に生まれたサクラの品種



普賢象 (ふげんそう)

江戸時代には植物栽培が盛んになり、キク、アサガオ、サクラソウなどの花や、シダ植物など多くの品種が生まれました。日本のサクラを代表するソメイヨシノも江戸時代に生まれたものです。左の写真は江戸時代に生まれたとされる品種の一つで、普賢象や御車返し、御衣黄などのいくつかの品種は、明治の末期にアメリカにも渡りました。

荒川堤のサクラ品種



一葉 (いちよう)

明治期になると武家屋敷が無くなり、それとともに、植えられていたサクラも姿を消してしまいます。そのような中、沼田村 (現在の足立区) の戸長であった清水謙吾は、花見の名所づくりや堤防強化などのために、荒川の堤に3000本以上の桜を植樹します。荒川堤に集結した多くのサクラは、のちに栽培品種の研究対象になりましたが、太平洋戦争の終戦後には、荒川堤のサクラは再び姿を消してしまっただけです。

ウメは世界に1種！？

ウメ *Prunus mume* (Siebold) Siebold et Zucc.

ウメは中国原産で、奈良時代以前に日本に渡来したと考えられています。当時はウメのことをムメと発音していたことから、ドイツの博物学者シーボルトによって、学名の種小名に「mume」とつけられました。日本には、約600種類もの園芸品種が日本にあると言われていたりますが、ウメの品種はすべて *Prunus mume* という1種がもとになっています。

ウメの品種



モモの仲間とその利用

すもももももさくらのうち？

かつてはスモモももももさくら属として扱ってきたため、「すもももももさくらのうち」でした。しかし、最新の分子系統による分類では、スモモももももスモモ属としており「すもももももすもものうち」となります。

かつての分類 (広義のサクラ属)



セイヨウミザクラ
(さくらんぼ)
Cerasus avium (L.) Moench



オオシマザクラ
Cerasus speciosa (Koidz.)
H. Ohba

新しい分類 (サクラの仲間)



もも
Prunus persica (L.) Batsch



スモモ (プラム)
Prunus salicina Lindl.



ウメ
Prunus mume
Sieb. et zucc.

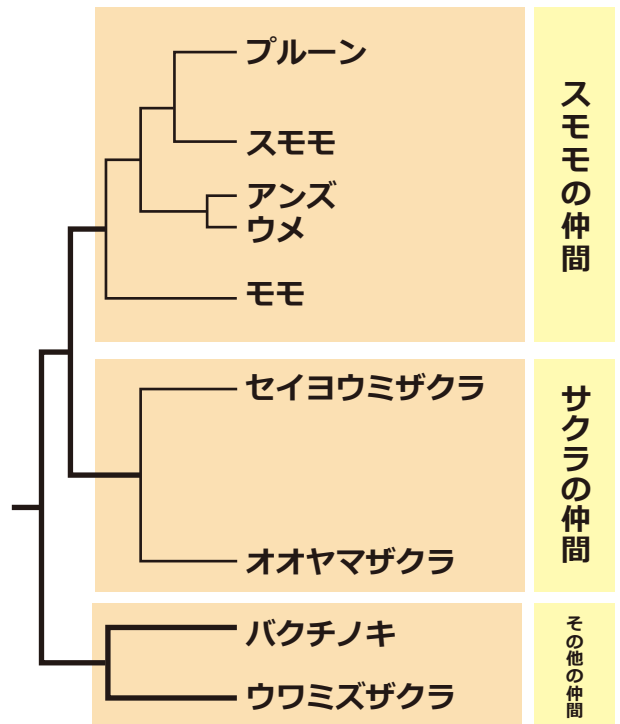


プルーン
Prunus domestica L.



アンズ
Prunus armeniaca L.

分子系統によるウメ、モモ、サクラの関係



Shuo Shi et al. (2013) Journal of Integrative Plant Biology 2013, 55 (11): 1069-1079. のデータをもとに作成。

遺跡から出土したモモ

モモは、縄文時代から栽培されていたとされ、日本各地の遺跡から出土しています。出土する核の状態は、丸のままのものや、穴が開いたもの、かけらのもの、半分に割られたものなどさまざまで、果実だけでなく核の中の桃仁を利用していただことが明らかになっています。



モモ核の出土記録がある遺跡と
北下遺跡 (市川市) から出土したモモの核

データは、日本の遺跡出土大型植物遺体データベース (石田ほか, 2016) を参照した。

歴史の中の うめ・もも・さくら

わが国最古の歌集『万葉集』では、多くの植物がその美しさを詠まれています。すでに梅・桃・桜も登場しています。隋・唐の文化が導入される奈良時代以前から、大陸のさまざまな樹木が渡来しました。



楊洲周延作「富家之別荘」(1889年)

平安時代に入ると、桜の花が愛でられ、「花」とは桜を指すようになります。野生のサクラから栽培品種が開発され、江戸時代になると「染井吉野」などが生まれました。

江戸時代には、江戸城中や大名屋敷で造園の意匠を競い、花を愛でる文化が盛んになります。武士や庶民の暮らしの中に、盆栽や庭木を栽培し愛玩する花卉園芸文化が展開したのです。それが、やがて全国の城下町や都市へ広まり、花卉栽培や造園を業とする者たちが活躍し、園芸書や花卉をモチーフとする絵画や書籍の出版が盛んになりました。

🌸 歴史の中の梅 🌸

梅は、奈良時代初めには既に大陸から渡来していたと考えられ、『万葉集』では次に次いで多くの歌が詠まれています。奈良時代の歌人として知られる大宰府の長官、大伴旅人を囲む梅花の宴で詠まれた和歌は、元号「令和」の起源となりました。

平安時代の随筆『枕草子』では、「木の花は、濃きも薄きも紅梅」との記述があり、その頃中国から伝わった紅梅の人気の高かったことがうかがえます。南北朝から室町時代頃に成立したとされる謡曲「鉢木」では、梅が鉢植盆栽として親しまれる様子が描かれています。

江戸時代に入ると、武士や庶民の間で園芸が盛んになり、梅も多くの品種が紹介されるようになりました。江戸とその周辺でも、梅の名所や梅園が形成され、浮世絵の題材にもなりました。



楊洲周延作「雪月花 野州 佐野雪
西明寺 佐野源左工門 妻白妙」
(1885年)

もも れいりよく 桃の靈力

桃源郷とは桃の花咲く理想郷を指すが、その説話に見られるように、古代中国では桃に神秘性や靈力があると考えられました。このとらえ方は、桃とともにわが国に伝わり、わが国でも桃は邪気を払う仙果とされました。『古事記』に、イザナギノミコトが亡妻に逢うべく黄泉国へ行くが、鬼に追われる途中、桃の実を投げつけると鬼が退散したという説話があります。桃太郎説話も、桃に靈力を見出すことの現れと言えます。

江戸時代になると、果樹として国産の桃が珍重されるようになります。さらに、明治期になると、中国から水蜜桃系のモモが導入されるようになりました。また、東京など大都市の近郊で桃園が営まれ、果実栽培を兼ねた花見の名所が形成されたのです。



『和漢三才図会』より
「桃」
(1712年)

さく はな さくら 咲くやこの花—桜—

『古事記』の中で、日向（現在の宮崎県）に降臨した邇邇藝命の妻となった木花之佐久夜毘売は、桜の化身といわれていますが、桜の花の美しさが讃えられるのは『万葉集』に詠まれてからとされています。

平安時代には、御所の内に「左近の桜」が植えられ、歴代の天皇が観桜の宴を催しました。『古今和歌集』では梅より多く詠まれるなど、桜が珍重されるようになり、「花」「花見」と言えば桜、観桜を意味するようになったのです。

江戸時代に入ると、上野（東京都台東区）や、将軍徳川吉宗が植樹し、江戸庶民の憩いの場となった墨堤、飛鳥山（北区）、御殿山（品川区）、玉川上水沿いの小金井（武蔵野市）などに桜の名所が誕生します。また、近代に入って全国に広まった染井吉野は、江戸近郊の染井（豊島区）から広まった品種で有名です。



『和漢三才図会』より「桜」
(1712年)

千葉県立中央博物館 春の展示「うめ・もも・さくら」 解説書

本書は、令和2年千葉県立中央博物館 春の展示「うめ・もも・さくら」の解説書です。

展示担当者：天野誠、内田龍哉、坂田歩美、原田浩、
○水野大樹

(五十音順 ○：主担当)

編集・発行 千葉県立中央博物館

発行日：令和2年6月2日